

根岸信 「中国のギルド」

根岸信博士は先に一九三三年に「支那ギルドの研究」を刊行され、ついで一九五一年「上海のギルド」、さらに昨年「中国のギルド」を発表され、本年五月、学術進歩に著しい貢献をしたものと認められ、日本学士院賞をうけられた。なお、本年八月九日をもって満八十才の寿齢を重ねられ、ともどもに敬祝に堪えないところである。さらに、ついで「中国の商人ギルド」を公刊される予定である。寿齢と研究意欲の壮なる学界に比類なく、ますます後進の蒙を啓られんことを

お願いする次第である。

X X X

本書の二大特徴は総合的であり、実証的であることである。既往の中国ギルドに関する内外の幾多の研究は断片的であるか、もしくは北京、蒙疆、日本等の局地的であるのに対し、本書は中国ギルドの起源から現状におよぶ歴史的観察と、同郷団体、経済団体、マーチャント・ギルドの三分類による主要ギルド諸団体の構造と職能の分析が試みられ、地域的には中国全土のみならず、海外の北はシベリア沿海州から日本、南洋方面にまでおよび、まさに中国ギルドの総合的研究成果といいえよう。

第二の特徴は実証的であることである。本世紀の初頭から過去半世紀間にわたる屢々の実態調査と、集収された豊富な碑文、匾額、古文書、章程、規則等の中国ギルド資料と実地調査にもとづき、あくまでも実証主義の立場を貫かれている。昭和年間初頭に公刊された「支那ギルドの研究」の再刊ではなく全然別個の書卸しの研究であり、最近の国府から中共治下の事情にまで説きおよび、第一篇総説、第二篇同郷団体、第三篇経済団体の三篇からなり、第四篇に該当する商人ギルドと、ギルドに関する理論的考察はまとめて次巻にゆずられて

二

まず、第一篇では著者は中国ギルドを社会的・宗教的団体としての古ギルドと、商工団体としての新ギルドに二大別する。本書では新ギルドのうち同郷団体と経済団体を中心して取扱われる。

第一章では、中国ギルドの起源に関して、旧著におけるギルドの発生源に関する血族団体崩壊説を廃棄され、改めて中国固有の宗族、家族制から発達した国民性ともいべき結社性に求める新説を明らかにされた。

第二章では旧著で取り残された中国ギルド研究に関する六つの主要な問題点が明らかにされる。そこでは、一般の中国ギルドの国家権力との無関係説（二二頁以下）、公共觀念不在説（三〇頁以下）を否定され、小帮分立と大同団結の矛盾した二側面につき、陰陽説の太極の陰陽に分化する一元に帰すべき多元主義からその構成原理を明らかにされ（四三頁）、ついでクラフト闘争不在説（五二頁）、中国市場の完全自由競争説（六九頁）、官許独占不在説（七一頁）、中国ギルドの政治的無勢力説（七一頁）等について、後進の意見に対し、具体的事実をあげて鋭い反駁を試みられている。

三

第二篇の府県人、同省人等の組織する同郷団体については漢代に官吏の設立した邸にまで溯り、ついで各地に往来交易

する客商の設立する同郷団体についての史的發展が概観される。第二章では清代の有力な客商団体としての山西帮、三江帮、福建帮、広東帮について詳述され、とくに三江帮では商船会館、福建帮では上海泉漳会館、広東帮では上海広肇公所、海州ギルド等、前著「上海のギルド」で取扱われなかったものが新しく追加された。

第三章では同郷団体いわゆる「会館」の設立、組織、共通の職能、とくに会計については別章を設けて詳述され、私曲の行われなかった点において、会館が成員の私益追求機関でなく、公共団体であることをたゞされる。

変法自強後の民族主義、民主主義の抬頭とともに、貴族的性格の会館に代わって成立をみた民主的な「同郷会」の組織と職能が明らかにされる。

海外における同郷団体では、華僑の海外發展の經過と、そのギルド的結束の実例として新嘉坡中華總商會、鹿港の泉郊會館、台南の三郊等が取りあげられ、華僑の最近までの政治的動向を展開される。

本篇の結論では、客商団体が地元商人化し、民族主義の抬頭により地方別同郷団体が大同団結して、超郷党的、超職業的な連合団体としての中華會館、華僑總會等を設立するにいたること、さらに同郷団体であって経済団体としての機能をもつものについては、同郷商人団体、乃至は複合団体と呼称

され、それ等は分解して会館は古ギルド化し、社会的、祭祀的団体となり、別に経済団体として新商工ギルドを設立しゆく發展過程を明らかにされる。

四

第三篇の「経済団体」では、まずその萌芽時代から唐宋代の同業組合の行について明らかにし、清代では、商業ギルドが手工業ギルド、職人ギルドを圧倒し、商人ギルドの成立をみ、同府時代にギルドの民主化実現となり、中共治下封建的遺制として打破の傾向にあるまでの歴史的發展過程が概観されている。

第二章では、商工ギルドの組織について、營業地、出身地、格式等による種別、会員については個人、店舗、兩者の混合の場合あり、加入強制の存在する場合あり、たとい強制はなくとも、一般に加入に制限を加え独占の傾向あることを指摘される。執行機関については、徳望による賢能政治から究頭専制の場合も少くなく、必ずしもモースのいうごとく中国のギルドは、欧州のギルドよりも民主的であるとはみなしえないとされ、だが一面勢力均衡、職能分割、革車輪流、紳士招聘による矯正方法も行われ、巨舖専制から漸次民主制に移行してきた過程を明らかにされている。

第三章では、商工ギルドの職能として同郷団体の会館が古ギルド的な祭祀、相互扶助、慈善的、公共的職能を中心とす

るに對し、商工ギルドでは経済的な業務規定の制定とその励行を中心とするとし、信用維持、業務規約、共同事業、警察調停裁判、および処罰、對外防禦の五項目にわたつて詳述され、政治的機能にはみるべきものなかつたとし、また事業独占等の職能については第一篇の説明にゆづられてゐる。

商工ギルドの經營する共同事業としては倉庫、行棧、市場取引所、相互保險、協同組合等の事例をあげ、ギルドのカルテル化、株式会社への轉換の可能性が明示される。

ついで、警察、調停、裁判および制裁に關しては、總体的に和氣による民商事に關する調停が支配的で、警察裁判は目立たず、刑事におよぶことは稀れであつたとされる。最後に共同防禦の發動される場合について、成員の保護、ギルド相互の對立、官憲との折衝のほか、ボイコット、ストライキ等による對外防禦は民族主義の抬頭をみてからは、とくにその反撻力が強大であつたとし、ギルドの自存の目的を達成すること等、精緻な職能分析が展開されている。

第四章の「工商同業公会」では、まず商工ギルド法制化の經過が叙述され、民国七年北京政府の工商同業公会規則制定後、民国十五年には国民党第二全大会の決議により、中小商工業者業務員を糾合した商民協會が設立され、プロレタリア戦線の結成に努めたが、国民党の容共政策放棄とともに民国十八年消滅をみ、同年八月工商同業公会法が制定された。本

法により、国民党は商工ギルドをその統制下におき、その自主制を削滅し、領袖専制を打破し、民主制を確立した。だがなお公会の職務に業規の公訂、公益善舉事業等を認めた点において、伝統的なギルドの特色を保持せしめ、依然として古ギルド的職能は公所、会館に残留し、一方問屋総濶制(問屋中心主義)の残存をみる等、伝統主義的発展の経路が明らかにされる。

第五章の「商工ギルドの命運」では、マックス・ウェーバーの中国で合理主義の行われなないのは魔術の打破されないためであるとの説に反駁され、中国人にも伝統に因われず、合理化の能力あることを指摘し、伝統主義的基盤の上にたつ中国ギルドの衰退の機運にあることを明らかにされる。だが、なおその惰性はつよく、上海事変以降のギルド自救策、ことに銀錢業ギルドの聯合準備庫、生糸商、マツチ業の連合経営、紅茶輸出にみられる企業統制、マツチ業、保険業等の合本経営等、効果的なものがあつたことを認められる。

中共政権の成立後は労農を擁護し、居間商人の搾取の排除を意図しており、巨商大貴との妥協は至難であり、かつ伝統に依存することの多いギルドは中共の合理主義に攻撃せられ立脚の地を失うであろうと観察されている。だが、なお中共治下にあつても物価の安定、租税、公債、献金の獲得に公会の援助の効果的であつた事実をあげられ、大勢順応能力をも

つとし、極左的機械主義修正を警戒すべきでないかとされる。中共が素志のごとく、国営貿易会社と合作社の協同により商人を排除し、従つてギルドもまた遂に廃止されるか、あるいはギルド精神を保有する新組合に更生すべきか、これを将来の事実に徴するはかなからうと結ばれる。

五

博士の中国ギルドの研究は客観的觀察に徹底され、将来への予断は回避されている。駆使された碑記、公議、章程、大事記、徵信録等の原資料は全中国にわたり、会館、同郷会に閲するもの一〇七部、公所公会に関するもの一一八部に達し、この豊富な資料に基づいて、中国ギルドの多方面的に柔軟な觀察が試みられ、今日の中共治下の事情にまでおよび、既往の多くの諸家の一義的解釈に痛烈な反駁を試み、自らの中国ギルド観を余すことなく披瀝される態度はまことに壯観である。

中国では博士が国民性として觀察される中国人の結社性からすれば、今後それがとくにツ連を經由して中国に浸透する西欧の組合思想と結びついて、中国固有のギルド的結合がいかに再生してゆくかは興味深いものがある。さらに海外の華僑社会にあつては、伝統主義的なギルド的諸結合はなお十分の社会的存在理由をもつて残存している。西欧諸国では、すでにギルドは前世紀の遺制化したのが、アジア諸国のうち、こ

根岸信 「中国のギルド」

とに中国では、ギルドはあの広大な地域と巨億の人口を擁する社会にあって、上層の国家権力と下層の民衆との間の中間結合として、社会経済的に生々とした機能を果しながら、今日にまでおよんでいる。遺制としてのギルドの残存と、その再生化過程を通じて、中国ギルドの前途は未だ多面的な問題を孕んでいる。博士のライフ・ワークとしての本書は、中国史において等閑に附されがちである下層民間社会の、この錯綜した問題の迷路をとく輝やかしい画期的業績であり、その完成の日の早やからんことを御期待申上げる。(日本評論社刊行 A5版 全四八八頁) (内田直作)